

2023年度SoTLプロジェクト成果報告会 質疑応答一覧

	質問先	質問内容	回答（発表者記入）
1	城戸隆 先生（発表①）	こういった授業に受講生が積極的・好意的に取り組んでいるということで、興味深く拝聴致しました。AIやデータサイエンス等に関する技術に対して、多くの人は素朴に過大評価しており、「ユートピア」のためにはAIや人の知に対する理解の改善が必要ではないかと感じております。この授業のスコアに直接含まれることではないと思いますが、この点に関連して、受講生のAIに対する評価に変容があったかについて何か観察されたこと・分かったことがありましたら、お聞かせ頂けますと幸いです。	現在のAI、特に機械学習技術は過去のデータに基づいて統計的に未来を予測するもので、前例のない事象を予測するのは困難であること、また、訓練データの偏り（データバイアス）により間違った予測を誘引する可能性があることなどを、AIを騙す攻撃の例をあげて説明しています。AIや機械学習技術の限界を知ることに重要性を伝えることができますが、認識の変化を感銘に書いて下さった学生も多数おりました。また、因果関係と相関関係は異なるということや、パラドクスなどを用いて紹介しました。この点についてフィードバックをしてくれた学生も多々あります。技術の本質と限界を知ることの重要性は非常に大切なことです。このことを伝えていきたいと思っています。
2	城戸隆 先生（発表①）	教育研究の質を感じる発表、ありがとうございます。発表の最後に、「日本人学生と海外留学生、社会人と職務経験のない学生間で、データサイエンス学習の動機がどのように異なるかの比較分析が必要だと述べられました。そもそもなぜそのような比較が必要でしょうか。その比較を通じて、授業改善にどう役に立つと思われるか。少し主旨を説明しますと、こちらからの考えではありませんが、履修者の経験が異なるのはわりと当たり前で、対象を区別し、場合によって「保護、特別対応」みたいな形になるのはどうかなと思います。良く留学生は日本語がわからないから、優しい日本語を使ったほうが良いと言いますが、逆に難しい日本語を触れ合う機会がないということは、学ぶ機会も奪われてしまったのではないかと考えます。つまり、個人的な価値観でもありますが、「保護しすぎが良くない」と思うところがあるので、比較分析は、個別対応としたら、どのように対応していくのか、そしてそもそも個別対応が必要かどうかということです。	今回新設されたデータ総合応用データプログラム（修士）、医療データサイエンスプログラム（博士）は今年度が初めての開講でした。実際に中国人学生3名の修士のクラスと、日本人博士課程の5名のクラスでは、動機や目的、スキル、理解度にも大きな違いがあるのを体感しました。データサイエンスのあり方については国家的議論もなされ、必修化の流れもありますが、(1)「情報系・医学工学系」と「非情報系・非医学工学系」の学生、(2)日本人学生と海外留学生、(3)社会人と職務経験のない学生間で、データサイエンス学習の動機がどのように異なるかは、基本的なプログラムをデザインしていく上で非常に重要なデータになると考えています。私自身は、学生一人一人が学びたいのを知り、面白さを知り、パースペクティブをもって、一人一人の個性を生かしながら主体的に学んでいく学習スタイルが良いと考えています。対象を区別し、場合によって「保護、特別対応」みたいな形をとるというエクスタンスな講義スタイルのイメージは持っていません。分けない方がいい、インクルーシブ社会の実現というコンセプトにも共感しています。大人数の授業では、難しいかも知れませんが、現状の少人数の授業では、一人一人のバックグラウンドや個性にあわせた参加型の講義が可能であると考えております。
3	城戸隆 先生（発表①）	城戸先生、大変興味深いご発表ありがとうございます。情報処理の授業を担当していることもあり、また、自分自身の教授能力によるのですが、技術的な指導すべき課題について、「教えるべき内容の質をキープすること」と「学生の主体性を保持すること」の両立の難しさを実感しています。今回の授業効果についてどのように検討できるかという点です。もともとの知識（レディネス）にも大きく左右されることもあり、なかなか難しいのではないかと考えているのですが、どのようにお考えかご教授頂ければ幸いです。	「教えるべき内容の質をキープすること」と「学生の主体性を保持すること」の両立の難しさを実感されているのです。共感します。今回、ご報告した医療データサイエンスの博士課程の学生は、主体性をもった学生が多かったのですが、総合データ応用の修士課程の学生とは温度差も感じました。どちらもデータサイエンスの入門コースであり、「面白さを感じてもらう」という意識して成績評価は知識やスキルを問う試験は導入せず、レポートをメインにしました。「教えるべき内容の質」については数理解・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアムの教材を用いて、教育レベルの指針を得るようにしました。総合データ応用のコースは少人数であったこともあり、当初の計画を変更して、学生の質問に答える時間にあてることも行いました。学生の知識やスキルに関する客観的な授業効果については、事前に学生のもとの知識やスキルを把握していくことも含め、引き続き、効果的な方法を探求していきたいと思っています。
4	宋宇 先生（発表②）	輪読をせずフィールドワークだけを行う方法に疑問を感じ、参加型ゼミのスタイルで通常性で輪読を行ったりボードゲームで税を考える、フィンランド人と日本人の違い、最後に冊子を作るなどのコンセプトは非常に面白いと思いました。可視化が難しい成果、参加型ゼミに時間がかかる問題、ついていけない人といけなない人などの課題についても有難うございます。プロジェクトの成功にはかなりのノウハウが必要になるかと思いますが、最も重要なこと、意識していることなどありましたらご教示ください。	まず、プロジェクトの成功にはかなりのノウハウが必要であることは、確かであり、成功と成功の間には大きな差があるかとも思います。やってみたいとわからないので、一旦失敗のように見えても、それがいけないと分かった段階で成功であるとも言えますよ。とはいえ、実際にゼミ生のアンケート結果からでも、冊子づくりのプロセスでも、さらに客観的に第三者の目線である私・指導教員（1人の参加者）から、今回のプロジェクトは失敗ではないと強く思います。次に、「最も重要なことは？」との問いですが、ゼミ活動における最も重要なことを指すのか、それとも今回のプロジェクトで最も重要なことを指すのかによって、少し回答が異なります。ゼミ活動で最も重要なことは、知識のインプットがあった上でのアウトプットを行うことです。SoTLプロジェクト2023で最も重要なことは、できるだけ教員が口を挟まないことでした。ただし、教員は方針やガイドラインを示します。最後に、意識したのですが、やはりレベルが異なるゼミ生を最終的にある程度一定レベルに持っていくためには、参加型ゼミはどのくらい効果があり、何が難点、どう突破するかを意識しました。今回だけで解けない課題もありますが、考えるきっかけになり、今後の改善にもつながります。
5	宋宇 先生（発表②）	参加型学習を取り入れたゼミ設計の貴重なご発表、ありがとうございます。最後にやる気のある学生（という言い方はなかったかもしれませんが）が主導する場合とやる気のない学生が主導した場合の効果の違いのようなことをおっしゃっていました。たぶんやる気のある学生が主導する際には問題なく進んでいくのだと思いますが、やる気のない学生が主導する際、先生がどのような働きかけをされたのか、あるいはされなかったのかを伺いたく書き込ませていただきました。	とても重要な質問を頂き、ありがとうございます。というのは、こちらもプロジェクトを実施していた間、悩まされたことでした。今回、こちらの試行錯誤を結果的に申し上げますと、やる気のない学生が主導されるような前兆があった際に、もう1つのアプローチを提案しました。そこからやる気があるゼミ生からポジティブな案を提示してくれると期待していました。ですが、効果的な場面もあれば、効かない場面もありました。例えば、ゼミ合宿時のアンケート調査ですが、当初、2年のみが行う設定ではなく、全員でした。しかし、3年と4年はコロナ禍で合宿ができなかったから、やごと合宿ができるようになったので、合宿での交流や箱根でゆっくり過ごしたいという意見がありました。そこで、私は「箱根は外国人が多いので、この機会に海外のことを知りたくない？自分の英語力を試してみたい？さらに言うと、アンケートに答えてくれるかどうかは、実は外国人と日本人はかなり違います。どう違うかわかってみたいか？」などの問いかけをしました。結果、2年生は先輩たちに引っ張られず、「2年はやりませう」と至りました。もう1つの例ですが、2年生はやはり輪読を好まない傾向がありました。そもそも2年の輪読書籍はあとで選出して良いとの設定なので、本が決定された際に、「輪読ではなく、各自で読んで話し合えばいいのでは」という意見がありました。その時、私から「学科のゼミ合同発表会を控えているので、皆さんは何を提示するかを決めているようだが、どうやって説明、課題設定していくかまだ見えていない。このまま学問分析などの報告はどうか」と言いました。その後、2年ゼミ長は、「いや、やはり2年なら輪読をやりませう」と言ってくれて、助かりました。この課題は、実はゼミのみならず、講義タイプの授業にも考えさせられました。今後、いろいろな場面でも考えていき、試行錯誤をしていきたいと考えています。宜しくお願い致します。何かアイデアがあれば、ぜひ教えて頂きたいです。
6	西向堅香子 先生（発表③）	アクティブラーニングによる「映画を通じて伝える地球規模課題」、博物館でのポスター展示を動機付けにした教育実践はとても面白く感じました。グループ学習と個人学習のアンケート結果、書く力と文章力を磨く教育の必要性も興味深いですと感じました。プロジェクトの成功にはかなりのノウハウが必要になるかと思いますが、最も重要なこと、意識していることなどありましたらご教示ください。	振り返るともっと上手くできたかもしれないという思いはありますが、心掛けていたこととしては、できるだけ学生たちが難しくないようにコミュニケーションを取るようには努めています。連絡事項や授業内容、課題等々についてはLMSに掲載した後で確認すれば授業時に聞き逃しては次回の授業でついていけるようにして、グループワークで提出したものに授業内での教育内容のフィードバックに加えて休み時間やキャンパスで見かけた時に感想を伝えたり、休みが続いた学生にはショートメッセージを送って出席を呼びかけたり、1人でいけないうちは仲間を巻き込みながら話し掛けるなどして、教室に行きたくないという学生をできるだけ作らないようにには努めたつもりです。後は、学生の作品の制作過程で駄目出しはたくさんしたのですが、かなり事前の面白さやポジティブなことも伝えたり、学生たちがやりやすいように毎回の指示はできるだけ明確にして事前準備をしました。展示の専門的なノウハウは学芸員の先生を頼らせて頂き、私も学生と一緒に学びながらどうにか終わることができました。
7	西向堅香子 先生（発表③）	長期にわたるグループワークでのポスター発表に連なる学習とその成果・課題をまとめていただき、同様の方法をとっている身としてたいへん参考になりました。最後に書くこと、説明することなどの「伝える力」の不足を学生が自覚していたようですが、先生の観察されたところでは、具体的にどのような力が不足していたのか事例を教えてくださいませんか。両者が含まれていたとすると、「伝える力」について、それぞれの間に違いが見られたでしょうか。	学生たちの「伝える力」で明らかに不足していると言えるのはレポート作成能力です。プロジェクトで新しくチャレンジすること・オラルプレゼンやポスター作成を通して身につける伝える力については学生たちに関心・吸収力があるように見受けました。悩みの多い一生涯懸命な努力をして頑張った形になりましたけど、レポートに関しては、MEL10ガイダンスに加えて私もレポート作成支援ガイダンスを2回やったのですが、授業内で教えた後にワークもしたものの、提出されたレポートを見ると全然吸収・反映されていない学生が少なくありませんでした。苦手意識を持っている学生も多いように思います。34名中、2名は中国人で、日本語での会話は問題なく、コメントシートなどの記述も大きな問題はないです。オラルプレゼンでも問題なかったです。日本人のレポートを苦手とする学生と同様に、レポートを書くということについて、ガイダンスの時点から苦手意識が少なからず吸収しようという意欲・積極性はそんなに見られなかったように思います。大学生らしいレポートが書けるように、他の授業でも書く力を伸ばし構成など理解できるように指導していきたいと思っています。
8	西向堅香子 先生（発表③）	ご発表ありがとうございます。アンケート結果などのご報告、参考になります。評価方法に観察評価も記載されていたので、何を評価し、どうであったかご教示頂けると助かります。	スライドを作るほどまだ整理しきれなかったのですが、グループワークでの作業・展示準備・撤収作業の様子について意欲・積極的な姿勢とリーダーシップ・サポートをループリックでつけていました。そのスコア化した結果とスライドに入れた学生の自己評価については、大体揃っているのですが、差が出た学生が若干名いるものの、グループの中心的な役割を果たしたにもかかわらず反省するところがあるようにご丁寧に自分に厳しいものなのだと謙虚過ぎる回答に戸惑いを感じました。観察評価はこれまでしてこず慣れずして、アドバイス等々ございましたらご教示頂けますと有り難いです。
9	大貫真寿美 先生 茂垣まどか 先生（発表④）	学生の自覚、責任感の醸成、アイデンティティ形成という心理発達の問題意識にも興味を持ちました。STEAM教育というコンセプトがあるのですね。大学生を対象にしたSoTLではアンケート調査などでデータ収集が出来ますが、幼児を対象としたSoTLはどのようにデータをとるか、データ収集や分析が難しいと思ったのですが、何か有効な手段はあるのでしょうか？	興味を持ってくださり嬉しく存じます。心理学の研究手法ですが、幼児は自分の心境を言語化したり自己洞察が難しいので、確かに青年や成人への調査と同様にはできないことが多いです。幼児の研究は観察や実験（どういう行動をするかを観察する、条件を設定して行動をみる）が主流だと思います。あと、幼児の心理学的な研究をみると、保護者や保育者（保育園、幼稚園の先生）など、その子どもをよく理解している人が、他者評定をする手法が多いと思います。（短期大学人間文化学科 茂垣まどか） 幼児からの調査は記述も聞き取りもやはり困難であると思います。ですが、実践を行ってみたいと、確実に幼児の成長や幼児の内に変化が起きたと感じる場面が多々あります。それは、やはり表情や身体動き・その場で発言したことなどです。（発表時のPowerPointの画像でもお示ししましたが、表情に変化があります）やはり、観察者の設置や多数のビデオ撮影などにより幼児の内なる変化を読み取ることを検討しています。（教育学部 大貫真寿美）

10	大貫真寿美 先生 茂垣まどか 先生 (発表④)	「自分はどこから来たのか」、「自分とは何か」は本質的な問いだと思います。S-ESDS、MEIS、CM、EB、ED、REといったような様々な心理学的尺度があるのですね。必ずしも答えのない哲学的な問いだとも思いますが、青年期において健全なアイデンティティの自覚というものはあるのでしょうか？	1) 指標について: いわゆる客観的指標の一つとして、多くの心理学の尺度が作られています。おっしゃるように、「ころ」そのものを丸ごと記述(説明)しようとする、多種多様な個人の人格全体の内容を、一様にすべて測定できる万能な尺度というものもありません。尺度が示すのは、具体的に「私は〜」という質問項目にどれだけ当てはまるかということの自覚を自己評定している結果です。ですので、尺度で測定できるのは、あくまでも「ころ」のある一側面です。また、「自分とは何か」という問いへの答えが、「アイデンティティの中身」なのですから、実はこれは十人十色で人によって異なります。ただし、人生選択やそれに伴って自分の価値観や生き方についての意識が高まる青年期には、生き方を模索できてい、きちんと問題に取り組んでいる、あるいは、全然わからないで途方にくれている、他者は進んでいるのに自分だけ取り残されている気がして焦る、など、自分の生き方に向き合う心理状態(アイデンティティ確立・達成の方向vsアイデンティティ拡散の方向; これをErikson, E.H.は「アイデンティティの感覚」と呼んでいます)は、多くの人に共通していると考えられています。 2) 「健全」の意味: まさに、本研究で注目した結果に関連する事柄です。必ずしも全員が「確立」「自信」の方向でなければならない、ということはないと思います。実際に、今現在「何かを手付けられればいっかかわらぬ」と「拡散」している場合、一見、焦り、落ち込みなどネガティブな心理状態が多く見られます。しかし人生全体でみれば、そういった経験を経ることによって、より「自分の生き方」に向き合えることもあります。一方で、確かに、自分の人生選択に自信があり迷いが無い場合、充実して自尊心が高いのですが、もし仮に、例えば親からの刷り込みでよく吟味せずにそうになっているのであれば、将来的に「自分の生き方はこれじゃなかった」と願われる場合もあります。そういった点も含めて、今後検討していくことができたらと思います。お答えになっていまずでしょうか。 (短期大学人間文化学科 茂垣まどか)
11	佐々木沙和子 先生 (発表⑤)	保育資格取得のための必修科目でのSoTLなのですね。事例研究だけでは、イメージがわかりにくいという声もあったのですね。社会擁護の課題について事例検討と調べ学習というスタイルで授業設計をされたのですね。Googleformの記述統計をKH0oderをつかってマッピングするという方法も参考になりました。共起ネットワークの色分けや円の大きさは何を示しているのでしょうか？	最近の学生さんはニュースや新聞、本を読む等から情報を得る機会が少なく、文字からイメージする難しさもあるようです。視聴覚教材等も使用していますが、もう一歩改善が必要と考えて、今回SoTL研究に申し込みを致しました。 ご質問の共起ネットワークですが、出現回数が多い語ほど円が大きくなります。また、線と線で結ばれている語は関連性が強くなります。共起ネットワーク分析でサブグラフ抽出を行うと自動的に結果が色付けされ、グレースケールでも表示可能ですが、今回は視覚的に色付けを行いました。
12	佐々木沙和子 先生 (発表⑤)	必要な支援や子供たちの幸せについての地域の事例や新規事業の提案もとても興味深く伺わせて頂きました。課題発見が鍵になると思いますが、いい課題を見つけるために重要なことは何でしょうか？	まさに学生がいきなり課題を見つけてそれに対して地域の実情に即した支援をいかに検討することができるか、が鍵となります。そして、良い課題とは誰にとって良い課題であるか、を念頭に置いて考えることがポイントだと考えています。社会的養護は子どもの権利と幸せを保障することを目的としています。大人にとって都合の良い課題なのか、子どもの未来にとって良い課題なのか、その辺りをお考えすることができるかどうかが重要だと思います。保育を志している学生さんだからということもありませんが、今回の学生さんたちはこのポイントを理解してくれていました。
13	佐々木沙和子 先生 (発表⑤)	有意義なご発表ありがとうございます。参考になること多くでした。一点教えてください。授業を通して成長していない、毎回の授業で理解が出来ていない、と回答した学生さんの状況について調べていますでしょうか？もし、調べられていたら、どうしてそうなったのかご教えてください。また、対応策や改善策などあればご教えてください。	今回、授業の理解度について評価が低かった学生は、自分自身の参加意欲を反省しているような自由記述が多い印象でした(アルバイトで眠くて意識が飛びました等で、正直に書いてくれました)。また、授業を通して成長していないという回答者はいませんでした。あまり成長していない回答者は数名おりました。学生の授業の感想には「他の発表者の内容を聴いて、もっと調べようと思った」「もっとまじめに取り組みばよかった」と反省した」というように、自分自身を振り返る自由記述はありました。一方で、成長したと回答した学生の中に「他者からの発表を聴いて、自分も勉強になった。」「社会的養護について、自分の成長だけではなく、他者の発表から、地域の差は課題が色々あることを知った」等の自由記述が複数ありました。今回は授業の最後に全体の成長としてアンケートを行ったため、成長の背景を特定することは難しくなっております。質問に見合った回答ができていないかもしれませんが、今後の課題としては、アルバイトや部活等で忙しい学生さんにも毎授業、興味・関心を持ってもらうための教員側の努力と共に、発表を個人だけでなくその前もしくはグループで一つの地域について調べるといった活動を行うことで、個人発表への意欲を高め取り組みの幅を広げるのではないかと考えています。
14	若谷啓子 先生 (発表⑥)	保育者を目指している表現を研究しているゼミで、協働的学習をよりアクティブにするがこのSoTLプロジェクトの目的のですね。アクティブラーニングと保育のつながりに関する先行研究の紹介やアクティブラーニングの技法の紹介も有難う御座います。協働的学習における3つのプロセス、対話に関する4つの問いで変化を可視化する方法、自己評価と他者評価のマトリクスも参考になりました。主体的、対話的考え方に変化があったこともとても印象に残りました。主体的、対話的考え方に変化があった最も大きな理由は何か？なぜ他者に対する評価は高く、自己に対する評価は低くなる傾向があるのでしょうか？	「主体的」「対話的」に変化があった要因として、①実際に活動の中で、自分から意見をすることだけが主体的なのか、相手の意見を認めることが対話的なのか、体験の中で、学生自身が考えた結果、その考え方に変化が見られたのではないかと。②また自己評価をする、つまり1週間の取組みについて書かせることで、「主体的」「対話的」について考える機会になったのではないかと考えます。もうひとつのご質問について、自己評価よりも他者評価が高い要因として、今回の活動に限らず、他者を否定しない学生の傾向があることを前提として、討議段階、制作段階といった、授業や学習に参加できなかった、休んだため他の人がやってくれたという場合に評価が低いように思います。制作物といった成果が分かるものや参加できなかった等に対して反省の意味で記述されたものが多かったことから、「できなかった」が明確に分かるものに対して、自己を反省する傾向があります。一方で、他者評価においては、具体的に評価しているコメントが多かったことから、他者を認める力も身につけているのではと考えます。これについてはまだ十分な検証ではないため、他者評価が自己評価より高い要因について分析したいと思います。
15	若谷啓子 先生 (発表⑥)	個人的に初等教育は、教育の決め手だと考えているので、興味深く聞かせていただきました。ありがとうございます。さて、質問ですが、先生もこちらのテーマで意識している「参加型」が強調されているように思いますが、参加型とアクティブラーニングが異なるような意味合いを用いられているのでしょうか。それとも同じ意味で使われているのでしょうか。異なる意味で使われているならば、どう違いますか？	アクティブラーニングと参加型は全く別だとは考えておりませんが、本研究では別と捉えています。今回発表した事例が「参加型」の音楽人形劇になっていたのは、活動始めの段階で、昨年度の音楽人形劇の反省を行った中で、「参加型」にする方が子どもたちが楽しめるのではないかと意見が多かったため、「参加型」の劇について討議するよう指導しました。言い換えると、学生は子どもたちが「対話的」に劇を鑑賞するには「参加型」が効果的と考えたということなのだと考えます。つまり、アクティブラーニングの視点で保育を考えた結果とも捉えることができます。
16	若谷啓子 先生 (発表⑥)	大変興味深いご研究ありがとうございます。共同で行うことで、子どもたちの反応がより効果的だということも察共感いたしました。また、毎授業回の主体的活動の自己評価の変化が興味深いデータだと思いました。個人的な興味なのですが、全体として評価が変化するかだけではなく、個々人の変化(例: 低評価の人がだんだん高くなる、高い人が下がるなど)などの時系列の変化がわかると面白いなと思いました。データのマッチングが必要ですが、より深い変化の分析ができるかもしれません。	データ分析についてアドバイス、大変参考になります。個々の自由記述を見ていながら確かに、自己評価が低い学生、他者評価が高い学生、常に評価が高い学生、それぞれあります。個々の学生がどう変化したのか、分析してみたいと思います。より深い分析が期待できますね。大変参考になりました。
17	清水美帆 先生 (発表⑦)	留学生在大学の授業でプレゼンができるようになるためには、どのような目標が目的のですね。留學生30万人計画という背景もあるのですね。大学教育では、「紹介型」よりも「主張型」のプレゼンテーションを扱うべきとされているのですね。ベトナムと日本のマスク着用の動機の違いもとても印象に残りました。内容検討、資料作成、話し方、態度動作に関する4つの能力で評価されたのですね。伝わる発表だったか、発表技法で分析されたのですね。どのような理由でよいと評価しているかについての自由記述の分析も興味深かったです。よいプレゼンもスタイルや種類があると思うのですが、よいプレゼンテーションとして意識されている具体例やGood Practice (例えばTed Talkなど) はありますか？	本学で2022年より年に1度実施している「留學生プレゼンテーションコンテスト」を一つのGood Practiceと考えており、留學生らに出場あるいは聴衆として参加するように促しています。本研究でも「先輩留學生」が動画制作を行いました。できる限り身近な留學生を探してみたいと思います。
18	清水美帆 先生 (発表⑦)	留學生のプレゼン力向上に向けた動画モデルは日本語での発表イメージを持たない学生にとっては有効な素材となり、その利用の在り方またいへん参考になります。そこでこの学生による内的な評価基準の構築の様子が伝わってきました。今後ご研究を進めて行かれる上で、このモデルを参考にした学生の実際のプレゼンテーションを収集し、内的な評価基準と実際のパフォーマンスの分析していくような可能性はありそうですか？	事前調査で、学生が自分の発表に対する低評価の理由を「わからない」(51%)としたことや、「日本語力不足」と受け止める傾向が見られたこともあり、今後そのような分析もしていくことが必要だと感じています。内的な評価基準と実際のパフォーマンスを分析し、その差を発表者にフィードバックが多くなる意義だと思います。
19	清水美帆 先生 (発表⑦)	興味深いご発表ありがとうございます。アクティブラーニングにおいて自明のことかもしれませんが、やはり教材・実施の取り組みについて「どのように水路付するか」という点が学生の学びをけん引するのだということが明確に示され活動になりました。留學生の学ぶべき観点としてどのようなものがあるのか知りたく思いますので、他にどのような観点を注視点として扱う予定でおられるか伺いたく存じます。	今回は「発表力」について検討しましたが、「読解力」「作文力」「聴解力」はもちろん観点として必須かと思えます。また、CEFR-CVで詳細に述べられている「やりとり」の力や、「仲介」の力なども、今後は育成すべき観点としてあげられるように思います。今回扱った「発表力」の中であれば、質疑応答力、情報収集力(自分の主張を支えるため、それにふさわしい/信頼できるものを取ってくる等)も必要かと思えます。
20	内山由美子 先生 (発表⑧)	スポーツ医療健康教育において伝える力を高めるためのSoTL研究なのですね。映像によるゼミの紹介も印象に残りました。「自ら動くことを楽しむ」と思えるゼミ」というコンセプトはとも共感しました。音楽もスポーツもコミュニケーションツールという共通点があるのですね。参加型演奏会と参加型健康教育の伝えるために尽力したこととリンクした動画も印象に残りました。「楽しい」に上っている人を見ているのは楽しい」という考察ですが、「楽しい」は個人の価値観もあると思います。「楽しい」を科学するには、何が鍵になるのでしょうか？	学生が緊張した状態でも臨んだ本番では笑顔が少なく、楽しそうに見えなかったことにより、序盤では園児の反応がなかなか得られないという事象が実際にありました。参加型演奏会やスポーツの時間に、音楽やスポーツという資源を用いるのですが、その資源をどう用いるかは、ミュージシャンとスポーツマン次第です。用い方によって伝わり方も異なるということこそ、園児の反応や、学び合いによる学生のコメントにより認識し、「楽しく」伝えるスキルをお互いに向上させていくことができればと思います。そのため、科学するための評価指標として、園児の反応を入れながら示していくように思います。
21	内山由美子 先生 (発表⑧)	楽しく学ぶことは悪くないと思います。しかし、主観的な楽しいという感情を、皆で統一できるものでしょうか。例えば、本を読むのが楽しいと思う人もいれば、本が嫌いで、読書は本が嫌いと思ってしまうかもしれません。逆に言うと、楽しくないが、有意義な活動もいっぱいあります。やったあとに楽しいと感じることもあるかと思えます。楽しくないから、よくない、やらなというメッセージになってしまうのでしょうか？	ゼミで学生は冒頭にご紹介させていただいたように、「ミュージシャンシップ」「スポーツマンシップ」に則り、音楽・スポーツをする人としての心構え・態度・精神・技能・倫理を意識しながらその伝え方を学んでいます。その中で、音楽とスポーツをコミュニケーションツールとして、音楽やスポーツが好きでない人にも「楽しく」伝えるために、〇〇シップに則りをもって「楽しい」とするのを学生たちに考えさせて定義づけさせます。結果、楽しいと感じられない子でもいるかもしれませんが、音楽やスポーツに触れるきっかけになるのではないかと思います。まだ十分分析できておらず、そのあたりが十分お示しできませんでしたが、その部分についてわかりやすく分析できたらと思います。

22	内山由美子 先生 (発表⑧)	音楽・スポーツを主体とした子どもたちの参加型のプログラムを実施している両ゼミの交流をとっても興味深く拝見いたしました。学生にとってゼミ交流を行うことは客観的な視点によって互いの活動を分析し、かつ自身の活動に対するフィードバックが得られているのではないかと感じられました。音楽とスポーツという共通する「楽しむこと」をキーワードとして学生の主体的な学びにつながっている様子が勉強になりました。両ゼミ交流において難しいと感じられたところはどのようなことでしょうか。	ゼミは閉鎖的になってしまいがちなので、同じ対象にアプローチの異なることを行っているゼミとの交流・音楽のゼミ生からの客観的なコメントによる新たな気づき、見習いたいことの発見は貴重な機会でした。難しかったことは、研究の序盤、学生に研究の目的を説明しても、なぜ音楽？なぜスポーツ？というようになかなか柔軟にお互いのやっていることについて知り合おうとしなかったことで、やや教員の前のめりのような感じが否めなかったことです。特にT1の時点でその傾向が強かったです。本番後のT2は学生個々の成長もあり、お互いの参加型企画を興味を持って見られるようになり、コメントも大変肯定的になりました。そのため、最後の最後、本番の後に学び合い効果のピークが来るのではなく、本番前の段階で一旦交流し、お互い大変なところ・苦しいところを共有する機会があってもよかったですかもしれないと感じています。
23	内山由美子 先生 (発表⑧)	大変興味深く伺いました。主体的学びには「楽しむこと」が大切だと、授業をしていると体感的に得ていますが、学生自身の自由記述などからリアルに感じられ納得できました。自分の研究でもいつも悩むところですが、学生の「実感」「自己評定」とはまた別の視点として、実際にどのような変化があったかという客観的な視点があると思いますが、ご研究の中では、どういったやり方でその成長を示すことができそうでしょうか。ご教授頂ければ幸いです。	共同研究者の先生とともに、本番に向けての進捗状況を報告し合う際、学生がもがき苦しんでいる時期、投げだしている時期、分裂している時期など様々な時期を経て本番を迎えていることがわかりました。本番後に大きな成長が見て取れますが、そこで毎年ゼミが終わってしまいます。今回は研究にしたいのでこれを報告書にまとめたと思いますが、主観的なデータになってしまいがちなので、その点を気を付けながら、タイムラインを併用して報告書にまとめていきたいと思っています。
24	ビューニユ マガリ先生 (発表⑨)	「国際日本学を学ぶ」を対象クラスとして、日本人学生と留学生が共にコミュニケーション能力を高めていくことを目的なのですね。JLN学生とNJLN学生のアクティブラーニングとコンピュータツールの観点からの違いも印象的でした。データ収集のプロトコルも有難うございます。貴重なデータベースだと思います。ヴァイオリンプロットなどの視覚化データも印象的でした。個人目標からのクラウドワードを作成し、異なるコミュニケーションスキルに注目していることを可視化する手法も参考になりました。日本人学生はデジタルツールに遅れがあるのですね。日本人学生は多文化性を認識するのが難しいと感じているのですね。少人数のグループやタンドム形式はどの変更が学習を改善する可能性があるかと考えるのはなぜでしょうか？	本日はそのデータを紹介する時間がなかったのですが、留学生の発表後のフィードバックでは、緊張してうまく発表することができなかったというコメントがよく見られました。前期の留学生の自分の表現力の評価から考えると、より穏やかな環境で、つまり小グループやタンドムでアクティビティをすれば、留学生の日本語の学習ベースにふさわしいのではないかと思います。検討するべき点です。
25	ビューニユ マガリ先生 (発表⑨)	大変興味深い発表有難うございました。日本の学生の困難点と留学生の困難点、及び興味の違いがわかりました。リレー講義の各内容ごとの違いは何か見られたでしょうか。授業の内容分析もあるといいかと思いました。	授業の内容分析も確かに必要です。この研究を続けることは、授業の観察を行うことが重要だと思います。学生同士の相互作用を観察し、分析したいと思っています。